

通り過ぎること、埋め込まれること
——韓国安山市におけるカンボジア人移住労働者団体の設立過程を事例として——

ベル 裕紀

要 旨

エスニック・コミュニティやグローバル化、多文化主義といったテーマは、90年代以降、学際的であるだけでなく、政治的なトピックとなり、盛んに議論されている。これらの議論は、エスニック・アイデンティティ＝社会集団という擬似・国民国家的な世界観に立ち、固定的な場所に流入するフローという構図で人の流れを捉えている。韓国の移住民共同体を扱った先行研究でも、移民の流入に伴い、国民国家の中に異なる擬似・国民国家的な共同体が自然に生じるものとみなされる傾向にある。そのために、日常的な社会関係には十分な検討が加えられてこなかったのである。

本論文では、アクター間の相互関係に着目しながら移住民共同体設立の過程を描くことで、移住民共同体を捉え直すことを目的とする。その際、俯瞰的な視点ではなく、生活者／実践者の視点から移住民共同体の設立過程を描写するために、ド・セルトーの「空間の実践」を参照し、「歩行」と「通り過ぎること」、そして本論文で提示する「埋め込まれること」を分析概念として用いる。

本論文で扱う事例は韓国の安山市の元谷洞におけるメディア運動団体の支援によってカンボジア人移住労働者団体が設立された過程である。韓国の移住労働者は在留期限を定められた「通り過ぎる」存在として韓国に在留している。その中であって元谷洞は、事業所から離れた「歩行」という実践の場であり、このメディア運動団体もその一部として位置づけられる。メディア運動団体にはカンボジア人が集まり、アイデンティティの表出と見られるものが進行していった。しかし、移住民共同体を設立するためには、それだけでなく「埋め込まれる」存在が必要だったのである。つまり、「通り過ぎる」存在としての個々の移住労働者を繋ぎ、そして将来に渡って特定の場所に存在し続けるであろう人物である。固有の場所としての移住民共同体の設立には、こうした人物を中心に置くことが不可欠なのである。

キーワード

移住労働、韓国、移住民共同体、移住労働者支援、空間の実践

1. はじめに

1-1. グローバル化と文化的アイデンティティ

移住労働というトピックは人類学にとってそれほど古いものではない。しかし、人類学

者で移民研究者のキャロライン・ブレット (Brettell 2000) が指摘するように、移住労働という現象自体はマリノフスキー以降の近代人類学の歴史と比べ新しい現象ではなく、人類学者がそのフィールドでしばしば出会っていたものだった。ブレットが指摘するのは、1920年代後半にマーガレット・ミードがニューギニアのマヌスで観察し、記述した移住労働する若者の姿である。村の若者たちは2年から5年、長ければ7年、村を離れて白人のために働いた。「それはすべての若者が待ちわびるアドベンチャーだった。そのためにピジンを学び、帰村した者に熱心に話を聞いた」(Mead 1930: 119)。このミードが描写した光景は、現在の移住労働をめぐる観察が可能なものであろう。しかし、この光景はミードの関心の外に置かれた。そこには「定住主義のバイアス」(Malkki 1995: 208)があったとブレットは指摘する。このバイアスは人類学の伝統的な志向性と無縁ではない。

ここで言う人類学の伝統的な志向性とは、「文化を書く」(クリフォード&マーカス 1996)やオリエンタリズム批判(サイード 1993ab)などで度々批判されてきた本質主義、あるいは滅び行く文化の「救出」という志向性である。この一連の批判と議論については、多くの議論がすでになされており、ここであえて繰り返す必要もないだろう(cf. 小田 1997、杉島 2001)。ここでは差し当たり、対象社会の非歴史性という時間と境界によって区切られ、領域化された社会という空間が、言わばセットのような形で提示されていたことを確認するだけで良い。それは固有の文化を保持する閉じた共同体というイメージである。それに対して「時空間の圧縮」や「柔軟な蓄積」(ハーヴェイ 1999)という言葉で示されるグローバル化やポストモダニズム、あるいは、それらの局所的な場所での表出としてのグローバル都市(サッセン 2004)や断片化された都市のイメージ(cf. Davis 1999)は、古典的な人類学が扱ってきた社会のイメージと時間の面でも空間の面でも対極にある社会のイメージ、すなわち、境界が曖昧で、断片化され、流動的な社会というイメージである。

こうしたモダニティとポストモダニティの対比、あるいは境界によって区切られた社会と、その境界と単一性を脅かすフローの空間(アパデュライ 2004)の対立と併存という図式は、現代社会の一般的な理解の仕方であろう。マルク・オジェ(2002)の場所と非-場所、モダニティとスーパーモダニティという対比もこれと軌を一にする概念である。オジェの言う場所とは、自己規定/所属の場であり、他者との関係性が埋め込まれ、それを読み取ることができて、「移住・定着した際の諸々の痕跡」や「出自の表徴」を認めることができる、という意味で三重の象徴性を宿したものを意味している¹。これに対し、非-場所とは、これらの要素がすべてないものとし、空港や高速道路、ショッピングセンター、あるいは電話線など、通り過ぎる場所、通過の場所を例示する(オジェ 2002: 244)。

しかし、場所と非-場所、モダニティとスーパーモダニティという対比は、少々乱暴である。両者の間には多様な中間項が存在しうるし、また、非-場所であったはずのものが場所に転化することもありうる²。先に挙げたグローバル化論者の議論に共通しているものは、

¹ オジェは、これらの特徴を「アイデンティティ付与的」、「関係的」、「歴史的」という語で概念化している(オジェ 2002: 244)。

² 例えば、上田達(2010)はマレーシアの地方都市の再開発に伴い、立ち退きを迫られる違法集落の住民たちの様子から、非-場所が場所に変わっていく様子を如実に示している。上田は、違法集落に住む者にとって、やがては故郷に帰る日まで「一時的に住む」、あるいは

俯瞰的な視点に立っている点と、流動的なグローバルな流れの対照として、ロマンチックな共同性を前提としている点である。ジョナサン・フリードマンが指摘する通り、こうしたグローバル化の議論において、60年代以降、批判されていた固定的な文化や文化的なアイデンティティへの着目はむしろ高まる傾向にある (Friedman 2004: 179-81)。

1-2. 韓国の移住労働者と移住民共同体をめぐる議論

以上のようなアイデンティティを強調し、共同体をア priori な存在とみなす傾向は、本論文で取り扱う韓国における移住労働者に関わる先行研究にも強く反映されている。韓国における移住労働者の研究は、参与観察法による微視的な研究よりも、質問用紙調査を主な方法とする人権状況や労働環境に関する実態調査や支援団体に関するもの、国際比較など、政策的な研究が多い傾向がある (cf. 이정환&이성용 2007)。しかし、その一方で、以下に挙げるような、移住労働者自体を対象とし、長期の参与観察に基づいた研究が近年、複数発表されている。これらの研究では、支援事業においても、行事の計画と実施においても韓国人活動家と移住民共同体と呼ばれる団体との相互関係の上に成り立っていることが指摘されている点でも他の先行研究と異なった視点を有している。それとともに、特徴として挙げられるのは、90年代以降の移民研究のトレンドであるトランスナショナリズムや多文化主義の議論の影響を強く受けている点である。トランスナショナリズムとは、移民のホスト社会への同化や適応を研究の主眼としてきた旧来の移民研究に対して、移民と本国にいる家族や友人との直接的な繋がりを重視する視点である。この視点によって、移民および残された関係者たちは、移民が作り出すトランスナショナルな社会領野に存在しながら、エスニックな集団に所属意識を持っており、存在と所属が分離している状態が明らかにされてきた (Levitt & Glick Schiller 2004: 1010-1011)。しかし、トランスナショナリズムの安易な採用は移民と本国との関係性を過度に強調する危険性がある³。移民は本国とホスト社会双方における社会関係の中で、意識的にしろ、非意識的にしろ、可能な選択をしているという視点が欠落してしまうのである。この傾向は、コミュニティをアイデンティティと共通性によって統合された集団として捉える政治哲学が主導してきた多文化主義の議論⁴ (Cowan 2006) と重なることで、一層高まる傾向にある。すなわち、エスニッ

は「腰掛ける」場所としての違法集落に「ローカルという言葉で結ばれた共同体」(上田 2010: 230) が生まれていく様子を示している。それは、オジェの言い回しを真似れば、アイデンティティ付与的でも、歴史的でもなかった場所が、関係的で歴史的な場所として想起され、「ローカルであること」を参照点として、アイデンティティを引き込んでいくプロセスであった。

³ 例えばポータスらは、より多くの社会関係資本を持った移民が、より強いトランスナショナルな紐帯を保持し、送り出し社会への影響力を持っていることを指摘し、「トランスナショナルな移民」と明確に定義できる者は移民の中でも少数派であるとしている (Portes, Guarnizo & Landolt 1999: 224)。しかし、後述するパク・グァンウ (Park Kwangwoo 2014) のように親族よりも狭い親子や夫婦間での送金や情報のやり取り、母国との象徴的な繋がりがりまで含める広範な概念として議論されることも近年では珍しいことではない。

⁴ ウィル・キムリッカ (1998) に代表されるリベラルな多文化主義にしろ、チャールズ・テイラーなどの共同体主義的多文化主義 (テイラーほか 1996) にしろ、文化=エスニック・アイデンティティ=社会集団というものが多文化主義の議論の前提になっている。両者の

ク・アイデンティティ＝社会集団という擬似-国民国家的な枠組みで移住民共同体を見るという傾向である。そこでは、日常的な人と人との社会関係に対する十分な検討がされないまま放置されてしまう。

例えば、イ・テジョン (이태정 2012) は、移住労働というものを場所の移動だけでなく、階級的な移動を伴うものとみなし、滞在期間が10年近くに及ぶ長期滞在者を中心にインタビューを行い、アイデンティティの変遷を分析した。その際、変形アイデンティティという概念を用い、韓国への移住経験と労働組合や韓国で「移住民共同体」と呼ばれる国籍別の団体での活動が、アイデンティティの変遷にいかに関与しているのかを分析した。ここで注目すべきは、彼女は国籍別の団体を、その内部の葛藤や分裂を含意しつつ、「エスニック共同体」と呼びつつ、それらを労組とは異なる自然なものとして扱っている点である。すなわち、ノルベルト・エリアスとジョン・スコットソン (2009) の議論を参照し、移住労働者を「部外者」と位置づけ、韓国における移住労働者に対する差別がエスニック・アイデンティティを強化しているとして、それを集団形成の理由として挙げている。また、キム・ソンイム (김선임 2012) は、ミャンマー、バングラデシュ、フィリピンの移住労働者を対象に、複数の移住民共同体の形成を分析し、そこでの民族的アイデンティティと宗教的アイデンティティの競合の様子を示している。両者の議論に共通しているのは、こうした団体の形成や分裂の過程を移民の出身国における政治的、文化的な枠組みの延長で捉えている点である。

こうした団体を中心とした議論と一線を画するのが、安山市元谷洞のインドネシア人労働者を対象に調査したパク・グァンウ (Park Kwangwoo 2014) である。パク・グァンウは、トランスナショナリズムという語を明確に掲げ、インドネシア人労働者たちの祖国への送金やインターネットを使用した連絡、さらに、象徴的な繋がりを強調しつつ、元谷洞をエスニック・エンクレーブと見なす。その上で「インドネシア人」の内的な多様性に着目しながら、それにも関わらず、インドネシア共同体という団体が存在し、「インドネシア人」という単位を顕在化させている様子を、ネットワークや社会関係資本に焦点を当てつつ描いている。しかし、ここでもなお、異なる地域の出身者の地域アイデンティティや「エスニック・アイデンティティ」に根ざした集団があるという状態を自然なものとして描いていることに注意を向ける必要がある。

こうした移住労働者の共同体の多くは、韓国において90年代半ばから移住労働者支援団体が行っていた「移住民共同体耕し」という活動と関連して、キリスト教系、仏教系の支援団体の関与の中で形成されたものである。これらの移住民共同体が、学術的な議論において、民族的アイデンティティと結び付けられた社会集団という擬似-国民国家的な集団とみなされている。さらに、移住労働者の文化的、民族的アイデンティティと共同性を強調した移住民共同体の対象化は、本国との繋がりの強調を伴うことによって、先に挙げた俯瞰的な視点に立ったグローバル化の議論との親和性が高まることも指摘しておかなければならない。すなわち、本国との繋がりとホスト社会からの独立性を強調して移住民共同体

大きな違いは、前者が戦略的アイデンティティに、後者が本質的アイデンティティに依拠している点である (Cowan 2006)。

を描くことによって、ホスト社会に外部から流入してくる異質な集団というイメージを共有するのである。それは、移民が都市の一部に集住し、独自の場所を築き上げ、その場所は、どこか他の国と繋がっているというイメージである⁵。

しかし、この枠組みを少なくとも韓国における移住労働者に当てはめるのには無理があると言わねばならない。韓国の移住労働者は最大で4年10ヶ月という在留期限が定められた者たちである。韓国に滞在中は街から離れた工業団地内の工場もしくは農場で、それに付属する寄宿舎に寝泊まりしながら、毎日12時間程度の労働に従事するという生活を行うのが一般的である。すなわち、パク・グァンウがエスニック・エンクレーヴと称した元谷洞も、移住民共同体と呼ばれる団体も、ほとんどの移住労働者にとっては週末訪れる場所であり、住んでいる場所ではないのである。そして移住労働者にとっての韓国もまた、永住し、定着する場所ではない。同様の点で、イ・テジョンのように、韓国の移住民共同体を欧米におけるエスニック・コミュニティと同列に扱うのも困難である。なぜなら、韓国の移住労働者は住む場所を選ぶことも家族呼び寄せもできない以上、韓国の移住民共同体は集住や家族呼び寄せなどを通じて自然に形成されるものではないからである⁶。つまり、まず問わなければならない問題は、韓国において移住労働者の共同体と呼ばれるものが、いかにして成立しているのか、という点である。その際注意すべきは、アイデンティティと集団形成を連続的なものとして捉えることはできないという点である。韓国における移住労働者は、自国での人間関係を伴って移住してはならず、また韓国での時間のほとんどを事業所での労働に費やし、社会関係を新たに築く時間も極端に限られているのである。

本論文は、こうした先行研究の問題点に対し、通り過ぎる場所としての移住労働者にとっての韓国ならびに支援団体を描くことを目的とする。その際、オジェのような俯瞰的な視点ではなく、移住労働者にしろ、それを支援する韓国人活動家にしろ、その生活者／実践者の視点に立って、移住労働者団体の設立過程を論じる。その際の枠組みとして、以下に述べるド・セルトー（1987）の「通り過ぎること」と、その対概念として本論文で提示

⁵ 本論の主眼はトランスナショナリズムや多文化主義に影響を受けた本国との繋がりやアイデンティティの強調がグローバル化の議論との親和性を有していることを示すことであり、移民がホスト社会に統合されたものとして描かれているかどうかは、必ずしも重要ではない。しかし、一定の条件の下において、両者の強調が移民のホスト社会への統合の強調と両立し得ることを付け加えておくことは有益であろう。その条件とは、ホスト社会そのものを民族的な多様性に満ちた社会として描くことであり、先述のパク・グァンウ (Park Kwanwoo 2014) も韓国ではなく、元谷洞をホスト社会と位置づけることで同様の立場を取っている。こうした立場はキムリッカやテイラーなどにも共通するものであり、そのことによって「統合」の意味内容や「統一性」の源泉について難題に直面している (キムリッカ 1998; テイラーほか 1996)。つまり、アイデンティティや共通性によってエスニック・コミュニティを捉えたために、より上位に位置づけられるナショナル・コミュニティのアイデンティティや共通性が揺らいでしまうというジレンマに直面するのである。

⁶ 韓国における移民に関する限り、職場および居住地の自由な選択が認められ集住が可能で、かつ永住権取得の可能性がある、という条件を満たす移民として、中国朝鮮族と旧ソ連諸国出身の高麗人などの韓国系外国人が挙げられる。彼らは実際に安山市内においても、中国朝鮮族は元谷洞で、高麗人は安山駅から北に2kmほど離れたテッコルという地区で、それぞれ集住している。その意味で、本論文が対象とする移住労働者とは異なる形での団体もしくは地域コミュニティの形成をしていると言える。

する「埋め込まれること」に着目しつつ論じる。これによって、既存の社会に外部から流入し、そこに根付く移住労働者というイメージではなく、むしろ移住労働者と韓国人活動家との出会いと、それに続く両者の相互関係において、移住民共同体が生み出されていく、そのプロセスを追うことが可能になる。

1-3. ド・セルトーの歩行、旅の中の監禁と移住労働者

窓ガラスは見ることを可能にし、レールは通過することを可能にする。それらは、相補いあう分離の二様式なのである。ひとつは、観照者の距離をつくりだす。触れることなかれ。よく見るためには、手にとってはいけない——視界をひろげるために、手を失うのである。もうひとつは、通過すべしという指令をどこまでも描いていく。それは、ただ一本の線で書かれた命令、果てしなくつづく命令である。行け、立ち去るべし、ここは汝の国ならず、あそこもまたしかり——目による抽象的制御とひきかえに、足を失い、どんな自分の国だろうと立ち去るようにとせきたてる、別離の要請だ。(ド・セルトー 1987: 235)

ミシェル・ド・セルトー(1987)は、「旅のなかに監禁される」経験をこのように表現する。セルトーにとって、「場所」とは物理的なものの配置であり、そこを歩き、そこにあるものを手に取り、記憶されること、また記憶を呼び覚まされること、そして物語られることによって「空間」が実践される。空間の実践、すなわち場所を空間へと転換することは、移動と圧縮という作業を含んでいる。それは言うなればブリコラージュであり、欠落によって結び付けられた世界の断片からなるひとつの物語を紡ぎ出すこと、夢想することを意味する(ド・セルトー 1987: 227-230)。こうした視点は、オジェの場所とは全く異なる視点であることは、明らかである。オジェの言う場所も非-場所も、ド・セルトーの空間の中に含まれている。非-場所とは、場所が実践され、空間化される過程で、圧縮された場所を意味する。

都市を俯瞰的に眺める、高所の視点よりも、歩くこと、人ごみの中の視点を重視するのがド・セルトーの特徴である。歩くことで、様々な人々の日常によって作り出される空間が見えてくる。それに対して、高層ビルから都市を眺めることは、「大衆から抜け出し」、そうした実践を捨象してしまう(ド・セルトー 1987: 199-203)。その意味では、旅の中の監禁とはこのような高層ビルから眺める経験に似ている。列車からの眺めは高層ビルからの眺めのように全体を俯瞰することはできないが、空間から分離され、ただ風景として眺められるという意味においてである。対象との距離は高みによってではなく、列車の窓とレール、すなわち、見ることと通過することという分離の二様式によってもたらされ、細部が見えるように接近することも、留まることも許さない。移動と圧縮の方法は、窓とレールによってあらかじめ決められ、管理されているのである。この管理は、飛行機において、より徹底される。「もっと高い料金とひきかえに、いっそう抽象的で(風景などふき飛んでしまって、一挙に世界の模像シミュラクルが映しだされる)、いっそう完璧な(空中美術館にすえつけられた彫像とも言うべき)座をあてがわれているけれど、その座は、あまりに高いところにある罰として、自分からひきはなされたものを見るという(「メランコリック」な)

快樂をさしひかれてしまう」(ド・セルトー 1987: 234) ののである。

このド・セルトーの歩行、列車、飛行機という三つの移動のメタファーによって、俯瞰的な視点に立った時に見える通過とは様相の異なる空間の実践としての通り過ぎることに接近することができる。通り過ぎる過程において、時間は不可逆的で、一時的なものとして現れる。この一時性に抗するものが、特定の場所を固有のものとする——「戦略」——である。それと対極にあるのが、固有の場所を持たず、それゆえ一時性を利用し、機を捉えること、すなわち「戦術」である。こうした視点に立った時、移住労働というものは、固有の場所を持ってはいない。それは、韓国行きの飛行機に乗った瞬間から、研修を経て、工場の寄宿舎に寝泊まりしながら、毎日 12 時間の労働に従事する生活まで、ド・セルトーの言う飛行機のメタファーに近い状況を生きることになる。歩行が許されるのは、休日のみである。こうした日常の中にあって「移住民共同体」の設立という企ては、固有の場所を作る企てにはかならないのである。それは時間に対する場所の勝利(ド・セルトー 1987: 100) を目指すことを意味している。つまり、通り過ぎるのではなく、場所に埋め込まれるのである。

本論文が取り上げる事例は、韓国安山市元谷洞にあるメディア運動団体におけるカンボジア人移住労働者の「共同体作り」の過程である⁷。詳細は後述するが、韓国では 90 年代前半から移住労働者の支援団体が設立され、現行制度である雇用許可制が導入された 2004 年を境に拡大していった。支援団体が行う活動の一つに、「移住民共同体耕し」という事業がある。これは支援団体の傘下に国籍別の団体を設立するというものであり、本論で扱う事例も、大きくはこの活動の事例の一つと見ることができる。とは言うものの、本論で扱う支援団体は、当初メディア運動団体として、移住労働者に映画作りを教える目的で設立されたものであり、国籍別の移住民共同体を作ることは、当初想定してない活動であった。対象も、「移住労働者」全般であり、利用者の国籍も当初よりカンボジアが多かったとは言え、スリランカ、インドネシア、エチオピアなど多岐に渡っていた。それが、カンボジア労働者団体の設立支援という方向に転換したのは、法的な支援と寝床を求めるカンボジア労働者が押し寄せ、シェルター化したこと、そしてそれによってメディア運動団体としての機能が低下したことを契機としている。このカンボジア人労働者団体設立の過程を、当初、映画作りや韓国語を学ぶためにメディア教室に通っていたカンボジア人労働者、シェルター利用のためにここを訪れたカンボジア人労働者、そして、団体設立支援を行った韓国人メディア活動家の実践に焦点を当てつつ、議論していく。

2. 安山市元谷洞と移住労働者

2-1. 韓国の移住労働者移入政策と移住労働

韓国では、1991 年に海外投資企業研修生制度、93 年に産業研修生制度を導入して以降、実質的な非専門移住労働者の受け入れが開始された。しかし、翌 94 年には未登録滞在の移住労働者たちが、韓国の市民団体の支援を受け、街頭で抗議活動を行った。その後、市民

⁷ 筆者は 2010 年 4 月から 2013 年 8 月まで、同団体で参与観察を行った。

団体や労働組合の支援によって、「近代的奴隷制度」や「不法な人間などいない、制度が不法なのだ」といったスローガンを掲げたキャンペーンが行われ、制度改正への社会的な圧力が高まっていく⁸。2004年に政府が研修生制度の廃止と現行制度である雇用許可制の導入を決めたのを機に、雇用労働部や地方自治体が運営する移住労働者の支援センターが全国に設立された。それに加え、キリスト教や仏教などの宗教系の市民団体や労働運動系、メディア運動系の活動家が団体を設立するなどして移住民支援を行っている。これらの支援団体は、先述した「移住民共同体耕し」と呼ばれる国籍別の互助団体の設立支援の他、労働・法律相談、韓国語教室、そして「多文化祭り」と呼ばれる行事などを手がけている。

現行の雇用許可制では、韓国で働くことを望む者は、まず自国で韓国語能力試験を受けた後で、自国の政府機関を通じて求職申請を行う。韓国の事業主は、一定期間の「内国人求人努力」を果たした上で、外国人労働者の求人申請を雇用労働部に行く。雇用労働部は、これらの求職と求人申請を突き合わせる形で事業主に斡旋を行う。求職申請者は、自国で単年もしくは複数年の雇用契約を結んで⁹、はじめて韓国に入国することができる。つまり、韓国における移住労働者は入国する際にはすでに雇用先が決まっており、数日間の研修が済むとすぐに契約した事業所に向かうのである。この雇用契約がある限り最大で4年10ヶ月間の在留が認められるが、3年を超える場合は、その時点での雇用主が雇用延長を希望する必要がある。権利の上では研修生には適用されなかった労働法上の保護規定が適用され、事業所の変更が同一産業部門内で3回まで認められた反面、契約期間中の事業所変更には原則的に雇用主の承認が必要であるなど、労働権の行使に制限が設けられた。もっとも、雇用主の承認を経ずに事業所変更を行うことは不可能ではなく、雇用主による違法行為もしくは雇用契約の違反を労働者側が立証し、認められれば、事業所変更が可能である。こうした手続きを経ずに事業所を離脱した場合、当該労働者は在留資格が取り消され、未登録滞在となる。

こうした制度の下、移住労働者が働く職場は中小規模のものが多く、環境も良いとは言えない。工場の場合、1日12時間、週5日労働が一般的であり、土日などの特別勤務があることも珍しくはない。農場の場合では、休日は隔週土曜というのが一般的である。住居は職場の中に設けられた寄宿舎を数名で利用するのが一般的である。したがって、休日に意識的に出かけなければ、工業地帯、あるいは農場からほとんど外に出ることなく、韓国での滞在が終わることもあり得る。移住労働者が韓国に来る目的は、言うまでもなく第一義的には、お金を稼ぐことであり、借金の返済や家族の生活費、自国での不動産や自動車などの購入、家族や自身の大学の学費などに充てられる。そうした意味では、移住労働自体が一つの投資と言える。

しかし、その一方で職場から自発的に街に出る移住労働者も少なくなく、特に春先は多

⁸ 2003年から翌年にかけて「強制退去中断」、「未登録労働者合法化」、現行の雇用許可制とは異なる「労働許可制導入」を掲げ、未登録滞在者やそれを支援する活動家によって明洞での籠城闘争が展開された。労働許可制とは、在留権を雇用契約と連動させることなく、将来的には移住労働者の永住を許容するものであった。こうした運動の影響もあり、移住労働者の問題はこの時期大きな政治的な 이슈となった。

⁹ 雇用許可制の下での移住労働者の契約期間は単年契約のみであったが、法改正に伴い、2011年より複数年契約が認められた。

くの移住労働者が街に出る。彼らの想像した韓国は、薬品臭い工場でも、殺風景な工業団地でも、1時間に1本しかバスが来ない農村でもなく、高層ビルが立ち並び、豊かで発展した先進国の韓国である。街に出ること、ソウルの漢江公園や東大門市場、明洞に遊びに行くこと、あるいは海水浴場やスキー場のなどの観光地に行くことは、副次的だとしても、目的のひとつである。

さらに街には、市民団体や中央および地方政府が行っている移住労働者向けの教育支援施設もある。韓国語教室はその代表的なものだが、他にもコンピュータ教室やテコンドー教室などもあり、中には映画製作やビデオ・カメラ、あるいはスチール・カメラの使い方を教える団体もある。韓国語能力は、帰国後に韓国企業への就職や、通訳や観光ガイド、韓国語教師などの職を得るという現実味のある希望を持たせる。あるいは、カメラなどは冠婚葬祭などの機会に利用されるカメラスタジオの運営という夢を抱かせる¹⁰。移住労働の時間の終わりの先は見えないがゆえに、こうした可能性が移住労働者の足を街に運ばせるのである。こうした教室に毎週とはいかないまでも、定期的に通うことを通じて、新しい人間関係が生まれうる。それは、「歩行」(ド・セルトー 1987: 211-214)という経験である。

2-2. 移住労働者の街——安山市元谷洞

安山市元谷洞も、移住労働者が工場や農場における、旅の中の監禁から逃れ、歩くことのできる街のひとつである。この街が他の街と大きく異なるのは、安山市によって「多文化特区」と名付けられた、330メートル×240メートル程度の小さな区画の中に、中国料理店や中国朝鮮族料理店、南アジア料理店、インドネシア、タイ、ベトナムなどの東南アジア各国の料理店に加え、少数ながらカンボジア料理店やミャンマー料理店などが立ち並んでいる点である。そのためメイン通りは「多文化飲食通り」と呼ばれている。駅を挟んで南側は、かつては干潟があったが、1978年から工業団地の建設が始まり、現在では3,192万平米の韓国最大規模の半月・始華工団が広がっている。移住労働者が働く中小企業を中心に2012年末の統計で1万5千社以上の企業が稼働し、韓国人労働者を含め25万人以上(조혜영 외 2013: 8)、2010年の統計で移住労働者だけで約1万3千人以上が働いている(조혜영 외 2013: 15)。元谷洞は工団で働く労働者向けに作られた計画都市であるために、80年代から90年代に建てられた単身世帯向けのワンルームを多く配置した3階建ての「多家族住宅」と呼ばれる賃貸用集合住宅が多く見られる。この地区に90年代初めから中国朝

¹⁰ 本稿で主に扱うカンボジア人労働者にとっては、カメラスタジオというビジネスモデルを語る者は、ほとんどいないが、インドネシアやスリランカ人労働者の中には、積極的にこうした夢を語る者が一定程度存在する。カンボジア人労働者にとっては、むしろ韓国語を学んで、観光ガイドや通訳、あるいは韓国語教師になるという選択肢を持つようとするの方が一般的である。中には、キリスト教系の新興宗教の団体に通い、コーディネーターとして生計を立てることを目論む者もあり、こうした団体の中には移住労働者への布教を通じて、彼らの母国での布教や事業の足がかりを得ようとしている団体もあるようである。実際、こうした役割を期待されたり、実際にカンボジアに連れて行ったりしたカンボジア人労働者もいる。

鮮族を主として外国人が多く居住し、外国人人口の高い地区になっている¹¹。しかし、こうした外国人住民だけでなく、平日は工団内の寄宿舎に居住する工場労働の移住労働者が休日になると集まってくるために、休日にはほとんどは外国人という印象さえ与える。それゆえ、携帯電話ショップや銀行は、外国人スタッフをパートタイムで雇い、食堂もアルバイト店員を配置するのである。

キリスト教会系の移住民支援団体も多く、礼拝の他にシェルターや韓国語教室、相談業務などの支援を行っている。そうした支援団体を基盤として設立された「移住民共同体」も存在している。市も2007年に外国人福祉課を設け、2008年に外国人住民センターを建て、移住労働者を含む外国人住民に対して韓国語教育やコンピュータ教育、テコンドー教室を行っている。同センターでは市民団体に業務委託する形で、労働相談および通訳サービスも行っているが、カンボジア語には対応していなかった。

移住労働者たちは、銀行でお金を送金したり、支援団体に韓国語やテコンドーをしたり、食堂や道、あるいは移住民共同体の部屋などに集まって休日を過ごしている。筆者が調査を始めた2010年当初は、多文化特区の南側半分にインドネシア料理店が集中し、この区域でインドネシア人労働者を目にすることが多く、北側には、ネパールやパキスタン、バングラデッシュなどの南アジア料理店が並び、その区域でスリランカを含む南アジア系の労働者を目にすることが多かった¹²。また、本論文で主に扱うカンボジア人労働者は、街の中央のカンボジア食堂やタイ食堂に多く出入りする他、多文化特区の東側にあるキリスト教系の支援団体や本論文で扱うメディア教室に出入りする者が多く、そのため東の外縁の道でカンボジア人労働者に会うことが多かった。

3. 安山のメディア運動団体とそのシェルター化

3-1. メディア運動団体と「ドキュメンタリー監督の宿命」

安山市元谷洞において移住労働者を対象にメディア教育を行うメディア運動団体が設立されたのは、2009年である。設立したのは、元労働運動家で、メディア活動家のハン・ヨンチョル（仮名 男性 1965年生まれ）という人物である。彼はメディア活動団体を開く

¹¹ 安山市が発表している2013年10月の人口統計「外国人現況」によると市の人口は762,519人、外国人人口は60,968人(工団地域含む)であり、これは人口の8%に相当する。これに対し、同年同月の「洞別人口現況」によると、多文化特区を含む元谷本洞の人口は52,436人で、うち19,983人が外国人である。これは人口の38%に相当する。両統計データは、「安山市統計」の以下のURLよりダウンロードが可能。

<https://stat.iansan.net/new/Population.jsp?menuId=20002001&id=53&mode=S¤tPage=7&articleId=953057> (「外国人現況」) 2015年12月11日参照。

<https://stat.iansan.net/new/Population.jsp?menuId=20002001&id=53&mode=S¤tPage=7&articleId=953068> (「洞別人口現況」) 2015年12月11日参照。

¹² この景観は、徐々に変化が見られていく。一番の変化は、ベトナム食堂が、2013年ごろから、南西側に2軒建ち、2012年ごろにウズベキスタン食堂が同区画に出来たことである。ベトナム食堂はそれ以前には、多文化特区の北辺にしかなく、旧ソ連諸国の韓国系住民である高麗人が立ち寄りそうな店は多文化特区の外側の北にロシア系のバーだけであった。多文化特区の南西側に、食堂ができたことで、多文化特区の南側でもベトナム人労働者や高麗人の姿を目にするようになった。

前年まで雇用労働部の業務委託を受け市民団体が運営していた安山外国人勤労者支援センターのメディア・ホールの責任者として1年働いていた。そこで、彼は移住労働者に映像製作を教える傍ら、シェルター利用者を追い、その日常を描いたドキュメンタリー作品を製作した。彼は、民主化運動世代で、大学卒業後は身分証明書を偽造して工場で働き、労働者の組織化を試みたり、労働夜学で教鞭を取ったりしながら労働運動に関わった。その後、映像製作を学び、独立映画監督、メディア活動家に転身する。韓国では2000年代にメディア運動が盛んになっていったが¹³、ハン・ヨンチョルは、その先駆け世代であり、韓国独立映画監督協会の会長を務めた経験もあった。

ハン・ヨンチョルが移住労働者の問題に最初に関わったのは、富川にある移住労働者支援団体から送られてきた映像が契機だった。そこには、2か月分の未払賃金の支払いを要求し、工場に立てこもる移住労働者の姿が映し出されていた。彼ら移住労働者たちは、この闘争のために支援団体を訪れ、助けを求めたのである。ハン・ヨンチョルが求められた仕事は、この映像を一本の映画にすることだった。彼は、その映像が韓国人活動家によって撮られたものであり、移住労働者が撮ったものではない、という理由から、意識的に韓国人活動家の視点から物語を構成した。しかし、彼がメディア運動団体を作った目的は、映像製作者である自身が、移住労働者のことを代弁するのではなく、移住労働者自身が自ら物語を紡ぎ、表現することができるようにすることであった。

このメディア運動団体は、当初ソウルYMCAから活動費を得て、京畿エイズ撲滅センターの部屋を間借りする形で始められ、2011年には多家口住宅の「主人世帯」と呼ばれる35坪3LDKの部屋を借りて再出発した。2011年末には京畿道に非営利団体登録をし、文化財団から活動助成金を得て活動するようになった。設立から2013年8月までで、9名のメディア活動家や労務士が活動したが¹⁴、ここでは煩雑さを避けるために、唯一4年半の間、通して活動したハン・ヨンチョルを中心に議論を進めていく。筆者が調査を開始した2010年当初、ハン・ヨンチョルのメディア運動団体は、毎週日曜日にメディア教室を開いていたものの、そこに毎週訪れる移住労働者はおらず、定期的に通っていたのはカンボジア人労働者のヴァサナ（仮名 男性 1988年生）とスリランカ人労働者2名だけであった。ヴァサナは、2009年に同じメッキ工場のチュムナ（仮名 男性 1984年生）が製作した短編映画「勉強したい」にも出演し、この年、自身の日常を描いた短編ドキュメンタリー「韓国

¹³ 初の文民大統領である金泳三政権、初の政権交代を実現した金大中政権下で、独裁政権時代の精算が行われる。メディアの改革も当然その一連の流れにあり、2000年には放送法が改定され、KBSにパブリック・アクセスの実施を義務付けた。翌年から「開かれたチャンネル」という番組枠が作られ、市民が製作した映像を無償で、かつ無編集で流すこととなった。それに伴い、2002年には市民に映像製作とその教授法を教え、機材の貸出を行うメディアクトというメディアセンターが政府の援助で設立された。近代では文字の読み書き能力が、人間の基本的な権利のために不可欠であるように、21世紀にはメディア言語の習得、すなわち、メディアの批判的な理解能力と映像の製作能力が人間の基本的な権利のために不可欠である、ということが、基本的な理念である（김영순 외 2013）。こうした運動は、コミュニティ・メディアやマイノリティ・メディアなどとして活動領域を拡大していった（한국방송학회 엮음 2011）。

¹⁴ 彼ら／彼女らの多くは、平日には常勤スタッフとして他団体で活動していた。

に住むひとりの移住労働者の日常生活の痕跡を映画に集めてお伝えします」¹⁵を製作、チュムナもこれに登場した。上映会の前日の夜、編集の最終段階をハン・ヨンチョルが手伝った。工場における個々の作業工程のシーンをより短くすることをハン・ヨンチョルが提案したり、カンボジア人労働者同士が作業中にじゃれあっているシーンをヴァサナが断固残すと言ったり、ふたりの共同作業のような形で、この作品は出来上がった。

2010年末までは、こうしたメディア教室の活動よりも、訪問客への対応がハン・ヨンチョルの主な仕事になっていた。スリランカ人やインドネシア人、フィリピン人、エチオピアやコンゴ難民を中心とした安山外国人勤労者支援センター時代の教え子が友人を連れて夜遅くになって訪れることが度々あったのである。彼らは、撮影のために機材を借りに来たり、一眼レフカメラの使い方を習いに来たり、あるいは、ただ話をしに来るだけの者もいた。彼らの多くは、自分たちが所属する団体が関わった行事や友人の結婚式の様子などを撮影し、それを動画投稿サイトやSNSを通じて、仲間たちと共有していた。それゆえ、彼らは各々の「移住者共同体」の中で有名な人物であった。

メディア教室の教え子ではなかったが、カンボジア人労働者のソカー(仮名 男性 1986年生)も、「映画に関心ない」と言いつつ、友人を連れて遊びに来ることがあった。ソカーは、「映画よりも韓国語勉強したい」と言って、ハン・ヨンチョルに韓国語教室をやるように迫り、2009年には実際に韓国語教室をしていたが、2010年には韓国語の先生が見つけれず、韓国語教室は開かれていなかった。それでも、たまに友人たちを連れて訪れては、ハン・ヨンチョルをお酒に誘ったり、パーティをしたりしていた。

ハン・ヨンチョルは、こうした来訪者が来る度に、ハンディ・カメラを向けながら話をし、帰る時には必ず「これからどこに行く？」と聞いた。この頃のメディア運動団体は、ここを利用する多くの移住労働者にとって、たまに立ち寄る場所であり、彼らの多くは、ここは別に埋め込まれた場所を持っていたのである。そのことをハン・ヨンチョルも承知の上で、通り過ぎる移住労働者たちを撮っていたのであった。

ハン・ヨンチョルもまた、通り過ぎることを行っていた。彼は、ハンディ・カメラを持って元谷洞を歩くことを好み、路上や広場、コンビニ前にたむろする移住労働者を見ては¹⁶、「あの若者たちに、どう接近したらいいのだろうか？」と自問自答するように筆者に聞いていた。彼はまだ元谷洞のドキュメンタリーをまだ撮っていないのである。食堂のオーナーに密着取材をしたり、韓国人の夫から逃げてきた結婚移住女性にインタビューをしたり、

¹⁵ この題名は、ヴァサナ自身が、当初「題名」と考え、この作品の冒頭に映し出されるものである。ヴァサナは、当初、題名をカンボジア語で考え、ハン・ヨンチョルに韓国語で一単語ずつ意味を説明した。ハン・ヨンチョルもよりの確な韓国語にするために質問を繰り返しながら、この題名が考案された。しかし、公式の題名としては長く、文章形式になっているために、上映会などで紹介される際には「名もなき日々」という題名が付されている。この題名は、上映会前日の深夜に何らかの題名を付けなければならない状況で、筆者が提案したものである。ここでは、映画の製作者であるヴァサナの意図が反映されたものとして、本文中の題名を採用した。

¹⁶ 2011年頃までは、平日でも夜は、インドネシア人やフィリピン人の労働者が広場にたむろしたり、コンビニの前でお酒を飲んだりしている様子が観察できたが、空き巣など外国人犯罪が問題化し、警察が巡回を始め、広場に「多文化特区治安センター」ができると、夜の人通りは著しく減っていった。

広場で将棋を打っている中国朝鮮族のお年寄りと話をしたり、アフリカ人難民の知り合いと立ち話をしたり、この街に関わるということをしてきた。ただ同時に、カメラを向けることに、罪悪感のようなものを感じていた。以前インタビューをした韓国人の夫から逃げてきた結婚移住女性に偶然会い、インタビューを撮らせてもらった後で、ハン・ヨンチョルが筆者に語ったことは、「カメラで撮って、映画を作っても、相手にとっては何にもならない。私はそれで有名になるかもしれないけど、彼女は何も得られない」と、「ビデオ・カメラを構える時、申し訳ない気持ちになる」と話し、それが「ドキュメンタリー監督の宿命」であると語った。そう言った後で、彼は「人類学者ならわかるだろ？」と問いかけた。

この頃のメディア運動団体は、移住労働者が立ち寄る場所であり、埋め込まれた場所ではなかった。ハン・ヨンチョルもまた移住労働者との一つ一つの出会いを通じ、移住労働者に接近しようとしていたが、同時に、彼自身が通り過ぎる人でもあった。カメラがそうした関係を規定していた。移住労働者とハン・ヨンチョルの間にはカメラがあり、彼はカメラのモニターを通して移住労働者に接していた。カメラのモニターは、列車の窓である。それは見ることを可能にすると同時に規定する。視野をフレームが規定し、近づきすぎることを許さない。やがてこの映像が編集され、他の人の目に触れることを考え、映し出される画に神経を注がなければならない。それは、ルールに似ている。立ち去ることを要請しているのである。それこそが、ハン・ヨンチョルが感じていた「申し訳なさ」であり、「ドキュメンタリー監督の宿命」であった。

3-2. メディア運動団体の発展とシェルター化

しかし、2011年に35平米の住居に事務所を移すと、事前の広報活動だけでなく、2010年末の作品上映会やオープニング・パーティの甲斐もあり、メディア教室にも人が集まるようになった。特に、作品上映会では、メディア教室に通っていたヴァサナやスリランカ人労働者の作品だけでなく、夜にハン・ヨンチョルに会うために通っていたインドネシア人労働者らの作品も上映され、ソカーら遊びに来るだけの者も観客として多く集まった。上映後には質疑応答と懇親会が開かれ、このメディア運動団体を中心にバラバラに繋がっていた移住労働者たちが、初めて互いを知る機会となった。

それに続く形で、引越しと事務所開きのための準備が始まる。間取りを決め、電気の配線を直し、パーティの準備を進める間に、ハン・ヨンチョルと長い付き合いのバングラデッシュ人の長期滞在者や、夜にメディア運動団体を訪れていたインドネシア人やスリランカ人の労働者、メディア教室に通っていたスリランカ人やカンボジア人の労働者、そして、暇つぶしに来ていたエチオピア難民などが、一同に会することになった。それまでバラバラであった移住労働者たちの間で、十分とは言えないまでも、関係性が生まれるための最初の出会いが、この頃生まれつつあったのである。

新しい事務所は、居住空間であったことから台所で料理を作ることでもでき、床暖房もあり、冬でも暖かかった。それだけでなく、この年から始めた「トーク・バトル」というプログラムが、メディア教室の雰囲気を変えた。このプログラムは、くじを引き、それに応じて「今週あった印象に残ったこと」「将来の願望」「他の人の話の中で印象に残ったもの

に対するコメント」の3つを話すというプログラムであった。このプログラムの目的はシナリオ作りであり、一番面白かった話を映画化するということであったが、それにより、参加者同士の理解が生まれた。特に、出身国の違う者同士で知り合う機会となったばかりでなく、特筆すべきはその際の座り位置と対話の形式である。それまでの対話は、ハン・ヨンチョルが部屋でコンピュータに向かいながら、あるいは、ビデオ・カメラを向けながら発せられる問いかけに対して行われるものや、教室でも韓国人の講師の質問に対して、ホワイトボードに向かって座る移住労働者が答える、という形式のものであった。そこで行われる移住労働者同士の会話とえば、時折、移住労働者の一人が後ろを向いて話しかける程度だった。それに対して「トーク・バトル」の形式は、一番広い居間に円形を作って座り、相互に語り合う、というものであった。誰かが話し、それに皆が耳を傾け、コメントが加えられ、言語別に隔たりがちな移住労働者たちのコミュニケーションに広がりを持たせた。「映画に興味ない」と言っていたソカーも、このプログラムが気に入った様子で、しばしばルールを無視してソカーが進行した。ソカーの聞き方は、非常に具体的であり、例えば誰かが「(帰国後に)食堂をやる」と言うと、店の規模からメニュー、店の立地など細部にわたって詳細なイメージを聞いた。ハン・ヨンチョルが「違う。他の人へのコメントだ」と言っても、「全部良かったよ」とかわして主導権を握ってしまうのである。ハン・ヨンチョルにとっても、このルールは語らせるための手段であって、移住労働者が主体的に発言することは、むしろ歓迎すべきことなのである。

しかし、労働相談や寝床を求めて訪れる移住労働者、特にカンボジア人労働者が増えるにつれ、徐々に状況は変わっていった。この場所に事務所を移動させた当初、事業所から逃げてきたり、追い出されたりした労働者に対するシェルターとしての機能は、「緊急の場合のみ」という計画であった。2010年からしばしば労働相談に訪れる移住労働者がおり、また2011年初頭にヴァサナが突然解雇される事態もあって、シェルターとしての機能を持たせるかどうか、ということが問題になっていた。当初の予測では、労働相談の件数自体が多くはなかったことや元谷洞には他にシェルターがあったことなどから、メディア教室の活動の障害になるほど移住労働者が押し寄せることは想定していなかったのである。しかし、2010年末に安山市最大の支援団体である外国人勤労者支援センターが雇用労働部の支援打ち切りに伴い閉鎖され、安山市内の仏教系、キリスト教系の支援団体がシェルター業務を中止したことで状況は変わっていく。

2011年2月末には早速、最低賃金の半分以下の50万ウォンで働かされていたカンボジア人労働者3名が工場から逃げだし、手続きの間、事務所に寝泊りすることになった。さらに20歳のカンボジア人女性ボトゥム(仮名 女性 1991年生)が江原道の農場から逃げてきたことを契機に状況は変わっていく。ボトゥムの事件は、各農場で雇用されたカンボジア人労働者を地域の農協がパスポートと外国人登録書を取り上げた上で、一括管理し、最低賃金に満たない月100万ウォンの給料で、加盟している農場に派遣したというものであった。その被害者は18名にのぼった。元締め的女性はボトゥムらに、自らを王と同じだ、と話し、服従させようとした。雇用契約を結んだ職場以外の職場で働かせることが違法であるのみならず、極めて短期間の間に複数の職場に派遣されたために、未払賃金を請求すべき実際に労働した職場と事業主を特定すること自体が困難を極め、手続は長期化した。

結局、手続が終了し、彼女たちが事業所を変更できるまでに3ヶ月近くの時間が掛かり、その間彼女たちは無収入で過ごすことになった。

こうしてメディア運動団体に、メディア教室に通う移住労働者、言い換えるなら、週末毎に通り過ぎる移住労働者の2倍近いシェルター利用者が生活しているという事態が生じた。部屋が著しく汚れるなどの環境の変化が生まれたが、それでもシェルター利用者が固定されていたため、問題はそれほど深刻ではなかった。実際、2011年のクリスマスには、ソカーが古くからの友人たちを集めてメディア教室を訪れ、エチオピア難民など他のメディア教室利用者やシェルター利用者を混じえてクリスマス・パーティを行った。また、シェルター利用者の労働相談に際しても、ソカーやヴァサナが通訳として活躍し、シェルター利用者がトーク・バトルに加わることもしばしばあったのである。そうしたシェルター利用者とメディア教室利用者が、同じ空間を共有するという状況は、ボトゥムらが去った後も、シェルター利用者が少数であった時には維持することができたし、そうしたシェルター利用者の中から、通訳として活動する者が現れ、のちのカンボジア人労働者団体設立の中心メンバーになる者も現れた。

ところが、2012年の夏頃から状況はますます厳しくなる。それまでは、このメディア運動団体を利用した者がシェルターや労働相談を必要とする他の労働者にこの団体を紹介することが一般的であったが、この頃には紹介者を特定することが困難になっていった。中には「カンボジア寄宿舎があるって友達に聞いて」という者も現れ、入り口にはカンボジア国旗のステッカーが貼られるようになった。その上、シェルター利用者は平日で20名～30名、休日で多い時には40名ほどになり、必ずしも行き場をなくしている者だけが来ている状況ではなさそうな状況が生まれた。多くは数週間から3か月の期間でローテーションを繰り返し、中には週末だけ滞在する者も見られるようになっていった。

シェルター利用者が爆発的に増えたことは、労働環境や条件が厳しい農場労働者とのネットワークが、ボトゥムらの江原道の一件を通じて生まれたことに加え、2011年に複数年契約が可能になったことがある。2012年に、労働相談でシェルターを利用した者たちのほとんどは2011年以降に入国した者たちであり、契約期間が3年であった。そのため、1年を経過しても契約期間が満了にならず事業所を変更できない者たちが、事業所変更を求めて、ハン・ヨンチョルを訪ねたのである。その数は、ハン・ヨンチョルの言い方を借りれば、「幾何級数的（ねずみ算的）に増加した」のである。また、韓国政府がカンボジア人移住労働者の受け入れを拡大したことも、少なからず影響を与えたことも無視できない。2010年12月には7,383人であったカンボジア人労働者は（법早早 2011）、2012年12月には18,580人と2.5倍以上も増加したのである（법早早 2013）。

その状況は、ハン・ヨンチョルは、「難民村」と皮肉を込めて形容した通り、メディア教室と呼べるようなものではなかった。バスルームには悪臭が漂い、カバンの下やパソコンの裏からゴキブリが頻繁に現れるようになった。そのせいか、映像編集用の8台のコンピュータはすべて電源がつかなくなった。シェルター利用者を一人一人把握することは不可能になり、特に土曜日は人がごった返し、寝る場所がなくて台所で寝る者も現れ始めた。シェルター利用者同士の交流もなくなり、互いに名前も知らないし、話したこともない、という状況も珍しくなくなっていった。シェルター利用者が話すことと言えば「ポイチュ

バップ(不法)」であり、自分がこのまま不法滞在になるかもしれない、という差し迫った不安だけが、彼らの関心事であった。

初めのうちは、ハン・ヨンチョルらもこの状況に対処しようと映画の上映を行ったり、メディア教室に誘ったりしたが、「頭痛い」と部屋に閉じ籠って寝る者が多く、メディア教室を行う場所の確保自体が難しくなっていく。韓国に来てお金を稼ぐ、という第一義的な目的と期待を背負っている彼らにとって、このシェルター暮らしという状況は、宙吊りにされた時間に等しかったのである。そうしてカバンを退かすと這い出してくるゴキブリや電源の付かなくなった編集用のパソコン、靴下が真っ黒になるほど汚れた床、そこに寝転ぶシェルター利用者たちに、あの空間は占拠された。その上、賃貸契約期間満了前に、建物の取り壊し理由に家主から立ち退きを言い渡され、引越し先の選定や資金を集めるためのパーティの準備や寄付の呼びかけ、来季の活動費への申請など、ハン・ヨンチョルだけでなく、他の活動家も緊急かつ明確な目的のある仕事に追われていった。

4. カンボジア人労働者団体の設立にむけて

4-1. 会員制の試み

この頃、メディア運動団体にとって、今後の活動の方向性が見えない状況であった。メディア教室を行う場所が奪われ、パソコンは壊れ、メディア運動団体としての機能は著しく低下していた。食費や光熱費が財政を圧迫していただけでなく、ハン・ヨンチョルは労働相談への対応だけで一日が終わるという状況になっていた。ハンディ・カメラを持って元谷洞を歩き回る余裕はおろか、メディア運動団体を訪れる者にカメラを向けることもしなくなっていたのである。

事業所の変更は制度上、雇用主による解雇や事業所の閉鎖、雇用契約の満了以外の事由がなければ、雇用主の違法行為や契約違反を立証する必要がある。そうした違反行為を日時なども含めて具体的に指摘し、証拠となる資料を揃えなければならない。しかし、移住労働者の場合、言語の問題もあるが、それ以上に相談者自身が自身の直面している問題に対し、意識的でも能動的でもない場合や単純に法的な知識の不足している場合も珍しくない。そうした場合には、解決可能な問題を発見する作業を伴い、その分余計に時間と労力が費やされるのである。その上、申告後も関係機関によって認定を受けなければならない。雇用主が調査に応じないなどの理由で保留されたまま放置されることがないように関係機関に対する督促やしばしば雇用主との直接交渉などを並行して行う必要がある。ハン・ヨンチョルは、毎日終わりなく続く、こうした作業に疲弊していったのである。

こうした労働相談の急増とシェルター化に対して、全く対応しなかったわけではない。労働相談に対応するために近くの社会労務士事務所を紹介してもらい、平日、社会労務士が同団体に通った。それに加え、直接的には財政面の悪化を食い止めること、間接的にはメディア教室利用者とシェルター利用者との乖離を止めることを目的として、会員制を企画する。これを最初に提案したのは、ソカーであった。ソカーは支援団体との繋がりがあただけで、職場での雇用主との関係が改善されると考え、会員証を作ることをハン・ヨンチョルに提案していた。

ハン・ヨンチョルは、移住労働者から毎月1万ウォンずつ集める方法を模索し、2012年2月に第一回の会議を行った。2009年からメディア運動団体として利用している移住労働者や労働相談やシェルターとして利用しているカンボジア人労働者を集め、皆から任意で少しずつお金を集めることを提案したのである。ソカーが月3万ウォン出すことを提案し、ハン・ヨンチョルは1万ウォンでいいと言ったが、ソカーが譲らなかった。結局、ソカーが押し切る形で3万ウォンを集めることになった。ソカーは、筆者に対し「社長に問題があって、先生（ハン・ヨンチョル）が助けている。いいよ。僕も少し考えてた。だから、僕も助ける。他の人も大丈夫」と話し、以降、ソカーは以前にも増してメディア運動団体を訪れるようになった。メディア運動団体の「会員費」として任意で集めることになったが、この「会員」名簿の作成をめぐる、トラブルが起きる。

当時シェルター利用者の中で、労働相談の通訳を行っていたボーン（仮名 男性 1985年生）が、この名簿作りを担当したのだが、名簿に付された題名が「クメールの子供たち」であった。この会員制は、あくまでもこの団体の利用者を対象としたものであり、その範囲はカンボジア人だけではなかった。ハン・ヨンチョルらは、この誤解を解くために、ヴァサナを交え話し合いを行うが、ボーンは「他の国の人が僕らカンボジア人のためにお金を出してくれるなら構わない」と、この会員制度がカンボジア人労働者のためのものであるという認識であった。夜を通して話し合いを行ったが、その溝は埋まらなかった。ボーンらシェルター利用者は、この場所がシェルター化する以前のメディア教室であった過去を知らず、一週間に一回開かれるメディア教室はここに住んでいるシェルター利用者にとっては、副次的なものでしかなかったのである。ヴァサナやソカーといったメディア教室の頃から知っている者とボーンらシェルター利用者は、この場所に関する認識、意味づけを共有してはいなかった。

4-2. カンボジア人労働者団体設立の構想と「カンボジア人労働者」の可視化

カンボジア人労働者団体を作るという構想は、ボトゥムらがメディア運動団体を訪れ、シェルター化が始まった当初から存在していた。特にその必要性を強く感じていたのは、ヴァサナであった。ヴァサナにとってメディア運動団体は、「外国人が勉強する所」という空間であった。シェルター利用者が集まることで、その機能を果たせなくなって行っている状況に、ヴァサナは危機感を抱き始めたのである¹⁷。

それに具体的なイメージを与えたのは、メディア教室に時々訪れるインドネシア人労働者の存在だった。彼は、同郷の者50人ほどのグループでワンルームの部屋を借り、全員から月1万ウォンずつ銀行口座を通じて集め、家賃と光熱費を払い、余ったお金は故郷の孤児院に寄付をしていた。その部屋は、メンバーの共有財産というよりも、むしろ、公共財産である。メンバー全員が一度にその部屋を利用することは物理的に不可能であるばかりでなく、メンバー以外の者、故郷を異にする者もシェルターとして利用が可能である。シェルター利用者からはお金を取らない。また、このグループで海に行ったり、スキーに行

¹⁷ 2011年12月のメディア教室ではフォトストーリーの製作を行ったのだが、その際、ヴァサナが作ったストーリーは、「問題のある人がたくさん集まって、勉強をしたい人ができなくなる」というものであった。

ったりしていると話した。ハン・ヨンチョルは意図的にヴァサナの前で、彼にそのグループのことを語らせ、「ヴァサナ、ちゃんと聞かないと」とヴァサナに注意を向けさせた。その時、ヴァサナは「ちゃんと聞いているよ」と得意気に、にんまりと笑った。ハン・ヨンチョルの意図をヴァサナは汲み取っていたのである。この団体が、カンボジア人団体の母型になっていく。

その後も、ソウルにあるバン格拉デッシュ人のメディア活動家が開いたカルチャー・スペースでのパーティの時にも、90年代からバン格拉デッシュ人労働者団体を運営している人物をヴァサナに紹介し、団体の作り方や基本的な考え方などを話していた。筆者もこの時、メディア運動団体のシェルター利用者で、自身の事業所変更が叶った後も団体に通って、労働相談の通訳を行っていたヴィボル（仮名 男性 1983年生）をヴァサナに紹介した。ヴァサナは、シェルター利用者をほとんど知らず、2009年からのメンバーもそれほど乗り気ではなかったために、孤立していたのである。

ところが、メディア運動団体の会員をめぐる会議以来、毎週土曜の夕方、シェルター利用者と酒を飲むなど交流を図っていたソカーが、安山を去ることになってしまう。在留期間が3年を迎え、現在の雇用主に再雇用をしてもらわなければならない重要な時期に、ソカーは雇用主と喧嘩をしてしまったのである。この少し前に、ソカーの母親が病気で入院をし、ソカーとしては是が非でも再雇用してもらい入院費を送り続ける必要があった。しかし、雇用主は再雇用の届け出期間である在留期限の1ヶ月前になっても、「手続する、手続する」と言うだけで、実際の行動に移さなかった。ハン・ヨンチョルは「韓国の社長は一週間前にならないと何もしない」と言っていたが、ソカーはしびれを切らし、「ケチで、約束を守らない」雇用主に対する不満をぶちまけてしまった。ハン・ヨンチョルはソカーに対し「社長に二人で謝りに行こう」と言ったが、ソカーは譲らなかった。ハン・ヨンチョルが「そんなこと言ってお母さんが死んだらどうするんだ？」と言うと、「もう帰って、お母さんに会いたいんだ」とソカーは答えた。移住労働者は、自国にいる家族の生活のため、あるいは帰国後の自身の生活のために、本国での家族との時間を犠牲にしなければならない。二つの場所に同時にいることはできないということが、母の病という状況を前に顕在化したのである。移住労働の時間のジレンマの中で、ソカーも宙づりにされていたのである。ソカーは、ハン・ヨンチョルに対し、何度も何度も繰り返し、そしてやや唐突に「先生、オレ、家に帰るんだよ。もう会えないよ」と言うのである。この一件で、ソカーの在留期限の延長は叶わず、ソカーは安山を去った。

メディア運動団体の「会員制」が失敗し、ソカーが安山を去って以降、ハン・ヨンチョルらは、カンボジア人労働者団体の設立に本腰を入れる。例えば、2012年夏に雇用労働部が「指針変更」を打ち出し、事業所変更の際、求職者に対する斡旋状の交付を取りやめ、斡旋先の事業所の電話番号をテキストメッセージで送ることを発表した際、ハン・ヨンチョルらはシェルター利用者を連れ、安山の雇用労働部前でロアム・ヴォンという輪になって踊る踊りを踊って抗議活動を行った。それに加え、同年9月上旬に行った地域の劇団と合同で製作した映画の上映会の後にも、ロアム・ヴォンを行った。この上映会後のロアム・ヴォンは、多くの含意を持っていた。この上映会では、韓国人活動家が作ったメイキングビデオの他、インドネシア人労働者が作った2つの作品やバン格拉デッシュ人労働者が作

った作品、カンボジア人労働者が作った作品などであった。この時期メディア教室に通っていたインドネシア人4名、バングラデッシュ人1名、カンボジア人1名、ミャンマー人1名の他、ヴィボルらが会場の設置などを手伝い、カンボジア人のシェルター利用者が観客として来場した。メディア教室として行った行事にもかかわらず、その場でカンボジア人の踊りであるロアム・ヴォンを踊るように促したのである。楽しそうに踊るカンボジア人シェルター利用者の横で、メディア教室に通っていたインドネシア人やバングラデッシュ人らは会場の端に立って見ているしかなかった。この出来事は、おそらくハン・ヨンチョルらはそれほど意識的ではなく、観客であるシェルター利用者も楽しめるイベントにするという程度の意図しかなかったと思われるが、メディア運動団体が、活動の主眼をメディア教室からカンボジア人移住労働者団体の設立に移していることを象徴的に示していた。

それに先立つ7月末、メディア運動団体として計画していたラジオ・プログラム、移住民コミュニティ・ラジオの第一弾も「カンボジア」で行われた。当初、ソカーをメインMCに据える構想があったものの不可能となり、ヴァサナとヴィボルを中心に据えることになった。番組作りはヴァサナを中心に進められた。当日は、多くのオーディエンスを集め、メディア運動団体での公開録音という形式で行われたにもかかわらず、笑い声一つ起こらない真面目な番組が出来上がった。ヴァサナは、ヴィボルに労働相談の事例の数々を語らせ、ボトムに自身が体験した農場での違法派遣の実態と事業所変更が叶うまでにしたことを語らせた。すなわち、通常の手続だけでなく、ハン・ヨンチョルらと連れ立って弁護士事務所に行って訴訟の準備をし、民主労総で記者会見を開いた経験をヴィボルは語ったのである。ヴァサナが意図したことは明確だった。それは、これらの個々の事例が個人の問題ではなく、カンボジア人労働者全体が置かれている状況として認識させることであり、カンボジア人労働者が活動する必要性を訴えることであった。

それから3週間後の8月19日に、上述の雇用労働部の内部指針の変更に対する抗議デモがソウルで行われた。デモ当日までの1週間ほどは、シェルターの雰囲気は少し違っていた。ハン・ヨンチョルが当時のシェルター利用者に、抗議の署名を作るように促したせいもあったが、ノートパソコンからは動画投稿サイトで誰かが再生したジョン・レノンの「イマジン」が流れ、5~6人のシェルター利用者がそれをまじまじと見ている光景が観察された。そして、筆者やハン・ヨンチョルに対して「何人集めたら、制度が変わりますか？」と尋ねるシェルター利用者もいた。

移住労働者のデモは、通常2~300人程度の規模だが、その日は7~800人集まっており、うち3分の2以上はカンボジア人であった。その中には、かつてシェルターや労働相談でメディア運動団体を訪れた者も多く含まれていた。その日、壇上に上がったのは「水原のカンボジア共同体代表」と紹介されたチュムナであった。チュムナは、この1年半の間、水原の移住民支援団体に通い、支援団体傘下に「カンボジア共同体」を組織していたのである。同団体の韓国人活動家に聞いたところ、チュムナが来る前は、同団体にはベトナム人労働者が多かったが、チュムナが来てから、カンボジア人労働者が多く集まるようになったと言う。チュムナは、この日のために、友達と手分けして電話をかけたり、SNSに投稿したりして、デモへの参加を呼びかけたと話した。このデモによって、韓国社会に関与し、制度を変える意志が韓国にいる「カンボジア人労働者」の間にあることが、極めて

視覚的に認識されたはずである¹⁸。そして、その中心にはチュムナがいた。

4-3. カンボジア人労働者団体の設立

ヴァサナやヴィボルは、安山のメディア運動団体でカンボジア人労働者団体の設立の準備のための説明会を開き、2012年10月21日に準備委員を選挙で決めた。準備委員にはヴァサナとヴィボルの他、シェルターで世話人となっていた者2名、合計4人が選出された¹⁹。この説明会の際でも、その後の会議でも、ハン・ヨンチョルが冒頭で挨拶をし、主に財政面での圧迫について語り、カンボジア人労働者が互いに助け合う団体を自ら設立する必要性を訴えるのである。これは、ヴァサナの要請にハン・ヨンチョルが応じたものであり、ハン・ヨンチョルが話をしないことには、「(集まった)人たちは、私の話を聞かない」というヴァサナらが置かれた状況に対応するためのものであった。

ヴァサナは、部屋を借りて、メディア運動団体とは別にシェルターを作ることを最優先し、月1万ウォンずつ会費を集めるために、その後もシェルター利用者を中心に、2009年からのメンバーの一部も交えて会合を重ねた。現執行部のメンバーが帰国した後も継続して使えるように振込口座はハン・ヨンチョル名義で作った。ハン・ヨンチョルは、カンボジア人労働者団体が、自分を含めた韓国人の影響を受けず、独立したものでなければならぬ、という理念から、当初異論を唱えた。しかし、ヴァサナとヴィボルに「僕らが帰った後、どうする?」「僕らが帰った後も(団体は)ずっとなければならぬ」と説得され、受け入れた。そんな折、メディア運動団体の入っていた建物が建て替えられることになり、12月中の立ち退きを大家から通達された。ヴァサナは、それに合わせて、団体を設立することを決めた。メディア運動団体が新しい場所に移った後では、シェルター利用者がすんなりとカンボジア人労働者団体のシェルターに移らない可能性がある、という判断だった。

かなり強引な団体作りをしたせいもあり、会合の度にヴァサナが主導することに対して懐疑的な意見が出された。ヴァサナは、大学も行っていないし、こうした活動の経験もない、というのが、主な理由だった。筆者はチュムナを呼ぶことを提案し、ヴァサナが連絡を取って、チュムナが会合に参加するようになった。チュムナは、この1年間の間に大勢の前で話すことに慣れたようで、会合で話す姿は自信に満ち溢れ、ギャラリーには野次を飛ばす者もなく、私語をする者もなかった。それとともに、チュムナがヴァサナに対して、集めたお金の管理を明確にすると共に、韓国語教室などの教育プログラムを組むよう助言した。それは執行部に対する信頼を得るとともに、執行部を含めたメンバー間の人間関係を深めるためであった。

ヴァサナは、チュムナの助言を受け入れると共に、ペースを緩めた。「早くしないと」と

¹⁸ しかし、それは同時に、カンボジア人労働者しかいなかった、という失望も意味した。その日初めてデモに参加したカンボジア人労働者たちは「カンボジア人しかいなかった」と落胆していたのである。それは、韓国人活動家を中心とした主催者たちが、思いがけず「7~800人も集まった」それも「移住労働者が自ら呼びかけを行った」と希望を感じていたのとは対照的であった。

¹⁹ この時選出された委員一名は、当時のシェルター利用者だったが、その後一度も姿を見せず、代わりにヴァサナと高校時代からの友人で、以前シェルター利用していた人物が実質的に準備委員会に加わることになった。

焦るハン・ヨンチョルに対し、ヴァサナは「カンボジアにはカンボジアの方法がある。ゆっくり動くんだ」と信頼を得ることに重点を置いた。当初の予定よりも1ヶ月以上遅れた2013年1月20日に団体の正式名称が決まり、その二週間後にチュムナが選挙管理委員となって投票が行われ、ヴァサナが代表に選出された。特に部屋選びは入念に行い、3月31日になって漸くカンボジア人労働者団体の部屋がお披露目された。通常移住労働者がこうした団体のために借りるのは、ワンルーム程度の小さい部屋だが、2DKほどの広い部屋を借りた。その分、月々の家賃は3倍、保証金と呼ばれる契約時の一時金は10倍になったが、「お金をもらう以上は、ちゃんとした部屋を準備しないとイケない」というヴァサナの意志が貫かれた。明らかな予算超過で、ハン・ヨンチョルは困惑したが、「保証金と最初のひと月分は支援する」と言ってしまうために、押し切られることになった。そうして、ハン・ヨンチョルは自分が説得され、押し切られたことを、筆者に対して嬉しそうに語るのである。

5. 埋め込まれること、カメラを措くこと

労働相談が増えるにつれ、ハン・ヨンチョルが、ビデオ・カメラを撮らなくなったことはすでに述べた。その直接の原因は、労働相談件数の爆発的な増加であったことは確かであるが、ここでは、それとともに生じたハン・ヨンチョルの役割の変化に注目したい。それはこの団体の性格の変化を伴うものでもあったからである。

まず、ド・セルトー（1987）の列車のメタファーとビデオ・カメラを構えることとの類似点と相違点を整理してみたい。そうすることで、メディア活動家としてのハン・ヨンチョルの活動を正確に把握することが可能だからである。カメラを構えることが、列車と同様、見ることと通り過ぎることを強いるという点は、本論の中で既に述べた。それは対象との分離を強いるのである。しかし、ビデオ・カメラと列車が異なるのは、途中下車が可能であるという点である。ビデオ・カメラは撮り続けるわけではない。走っている列車から飛び降りることはできないが、撮っているビデオ・カメラはいつでも撮影をやめることができる。この性質によって、メディア活動家と移住労働者という二つの通り過ぎる者同士が出会う、ということが可能となったのである。

すでに本論中で示唆してきた通り、こうした分離の中であって、そこから抜け出した歩行という行為が含まれている。歩行における出会いは偶発的である。ここで偶発的であるというのは、その意味や目的があらかじめ与えられていない、ということである。それは、即興的で、不連続なものであり、パロールや語りのレトリックともつながる（ド・セルトー1987: 211-214）。メディア運動団体に突然訪問して来る者の中には、カメラを買ったから使い方を習いたい、などの明確な目的がある者もいるが、多くは、ただ遊びに来る者やカメラの扱いにしろ、編集にしろ、基本的なことはできる者たちであった。彼らは、ハン・ヨンチョルにしてみれば、特に教えることはない者たちである。それは、会社を変えたい、という明確な目的を持って来る相談者との出会いとは根本的に異なっている。そこで行われる会話は、職場での問題の聞き取りから始まって、申告可能な違法行為の特定へと至る、パターン化された労働相談の会話と異なっている。何が語られるのかわからない中で始ま

り、興味を持った部分をさらに聞くという、我々の日常にありふれている開かれた会話である。そうした会話における態度は、街を歩きながら、「あの若者たちに、どう接近したらいいのだろうか？」と自問していたハン・ヨンチョルの態度と同じものである。細部をよく聞き、観察し、そして機会を捉えるのである。開かれた会話に現れる細部は、ド・セルト一の議論に度々現れる「遺物」というメタファーと通じるものがある。こうした遺物は、「たがいどうしの関係が思考されぬままにひとつのブリコラージュのなかに並べられており、こうした「欠落によって結び付けられている」秩序は、「変装や遁走の効果を、あるパッセージから別のパッセージへ移動する可能性をつくりだす」(ド・セルト一1987: 228)。実際、これらの会話が一つの主題に収束することはなかった。自分が働く会社の話から韓国で見たものの話、故郷の話や家族の話、それから将来の話へと次々に飛んでいくのである。そうしたハン・ヨンチョルとの一対一との関係において即興的に行われていた会話を、準構造化し、集合的で、多方向的な会話にする企てが、「トーク・バトル」というプログラムであった。そこでは、例えばソカーのように、即興的に進行役となり、それぞれの参加者たちの話を引き出し、繋いでいく者が現れることもあった。

しかし、労働相談件数の増加は、ハン・ヨンチョルの日常生活を一変させ、こうした開かれた会話を困難なものにした。ハン・ヨンチョルは、2011年に事務所の引越しをして以来、一度も自宅に帰ることなく、事務所に泊まり込みで仕事を続けていた。当初はそれまでと同様にビデオ・カメラを持って街を歩くことも、訪れる者たちと取りとめもない会話をする時間的、精神的な余裕があった。しかし、労働相談が増加し、捌ききれない量になっていくと、労働相談の対応だけで一日が終わるようになっていった。

それとともに、数日から数ヶ月単位で交代するシェルター利用者が押し寄せた結果、シェルター利用者同士や、彼らと2009年からのメディア教室利用者など、この団体に関わる者たちの間を繋ぐものが、ハン・ヨンチョルだけという状態が発生した。カンボジア人というアイデンティティとメディア運動団体という場所との連結は、この場所が「カンボジア寄宿舎」と認識され始めた頃から、徐々に広がっていた。さらに、デモやラジオ・プログラム、ロアム・ヴォンを通じて、韓国にいる「カンボジア人労働者」というものが可視化されていった。しかし、そのこととあの場所で、ヴァサナを中心とする執行部に毎月お金を払い、その活動に参加するという行為や、ヴァサナ自身が団体設立のために奔走する行為との間には、何ら因果関係は存在しない。そのためには信頼関係に基づいた人間関係が必要なのである。確かに、シェルター利用者の中にはヴィボルのように労働相談の際に通訳を行ったり、他のシェルター利用者に気を配ったりする世話役のような人物が現れた。しかし、彼らですら時期の異なるシェルター利用者とは疎遠であった。その代わりに、ハン・ヨンチョルへの信頼は絶大であり、ハン・ヨンチョルが自嘲的に「宗教を作れる」と言うほどであった。それは、ヴァサナがカンボジア人労働者団体の会議をする際に必ずハン・ヨンチョルに冒頭の挨拶することを要請したことにも現れている。ハン・ヨンチョルは、もはや「通り過ぎる人」ではなく、むしろハン・ヨンチョルこそが文字通り「要」として埋め込まれたのである。

メディア運動団体の事務室の環境が悪化し、活動自体が停滞していき、ハン・ヨンチョル自身が、強烈なストレスを感じ、疲弊していく中で、しかし、彼は「エイズ(撲滅)セ

ンターにいた時よりはいい。今は幸せだ」と筆者に語った。それは、求められていることに応えることができるという充実感があったのであろう。そのことは、ハン・ヨンチョルがビデオ・カメラを構えなくなったことと関連している。それは、彼が「ドキュメンタリー監督の宿命」から解放された瞬間であった。

このことが意味していたものは、メディア運動団体のカンボジア人労働者団体への参与、あるいは一体化であった。その過程で、カンボジア性とでも呼べるものが強調され、他の移住労働者にとっては居心地のいい空間ではなくなっていった。ヴァサナにとって、カンボジア人労働者団体を設立する大きな動機となっていたのは、「外国人が勉強する所」がシェアリングユーザーによって失われることを問題視したことが契機だった。ヴァサナだけでなく、当初はハン・ヨンチョルにとっても、このカンボジア化はメディア運動団体を元の状態に戻すための一時的な緊急処置であったはずであった。しかし、実際にはそうはならなかった²⁰。カンボジア人労働者団体には、ハン・ヨンチョルが埋め込まれていることが、不可欠だったのである。互いに名前も知らず、顔も覚えていないカンボジア人労働者同士を短期間で結び付けるためには、ハン・ヨンチョルがビデオ・カメラを構えて、埋め込まれることが不可欠だった。そのために彼はメディア活動をやめる——彼の言葉では「保留する」——ことを選択したのである。そのことで、ハン・ヨンチョルという人格によって結び付けられたカンボジア人労働者の団体を生むことが、この事例においては可能となったのである。

6. 結論

移住民共同体を扱った先行研究において、アイデンティティと団体形成が地続きのものとして描かれ、擬似・国民国家的な前提の下で「共同体」が語られてきた。これには、特に多文化主義の議論における共同体の概念やトランスナショナリズムの拡大解釈の影響が強かったことは既に述べた通りである。先行研究における移住民共同体にもハン・ヨンチョルのような人物が存在している。それは、韓国人と結婚した者であったり、難民認定を受けた者であったり、10年近くに及ぶ長期滞在者である。彼らは、他の移住労働者が要請されている別離から逃れた者たちである。事業所に囚われてもおらず、帰国を強いられてもいない、あるいはその時期を先延ばしにし、埋め込まれる、ということをして可能にしている者たちである。しかし先行研究は、そうした者たちの特殊な役割に十分に注意を払って来なかったと言える。そのことが、ナショナルもしくはエスニックなアイデンティティと移住民共同体を地続きで結び付けることが可能にしている。それは俯瞰的なグローバル化の議論との親和性の高いホスト社会に移植される移住民共同体というイメージを再生産し、移住民共同体を支えている顔の見える関係から目を逸らさせてしまっているのである。

²⁰ 2013年4月のメディア運動団体のオリエンテーションには、多くのカンボジア人労働者ととともに、前年の特に上半期にメディア教室に通っていたインドネシア人労働者やバングラデッシュ人労働者もやってきたが、その場で、ハン・ヨンチョルはカンボジア語で挨拶し、カンボジア人労働者向けのメディア運動団体であることを示してしまった。ここでのハン・ヨンチョルの行動は、おそらく意図的、戦略的なものではなく、なんとなくしたことであろうと思われる。その影響もあってか、この年、画像や映像の撮影、編集を学んだ者は、一人もいなかったと言う。

それに対して、本研究の事例から明らかになったことは、アイデンティティと団体形成は地続きではないことである。特に韓国のように自国での社会関係を引き連れる形での移住が叶わないホスト社会における移住民共同体を理解するには丹念な調査を要する。つまり、アイデンティティの他に、そこで社会関係を形成し、団体を設立し、それを維持させる動機、アクター間の相互作用をつぶさに見ることなしに、移住民共同体は理解されえないのである。

事例で述べたメディア運動団体とカンボジア人労働者団体との一体化の過程で重要なことは、ハン・ヨンチョルとヴァサナ、そして労働相談に訪れたカンボジア人労働者たちとの相互関係において生じた結果であったという点である。それはカンボジア人労働者が大量に流入した結果でも、カンボジア人というアイデンティティから自然に生じたものでもない。労働相談にバラバラに訪れたカンボジア人労働者たちを繋ぐためには、ハン・ヨンチョルに対する信頼が不可欠であった。このハン・ヨンチョルに対する信頼が、彼の日々の実践から生じていたことは明らかである。それはいつも同じ場所において、行けば必ず助けてくれる、という信頼である。こうした信頼をカンボジア人労働者団体のために流用することによって、この団体は設立することができたのである。

韓国社会は移住労働者に住まう場所を用意してはいない。移住労働者政策は、移住労働者に韓国を通り過ぎることを要請している。こうした通り過ぎる存在としての移住労働者を捉えるために、本論文では、ド・セルトー(1987)の旅の中の監禁というモチーフを参照した。移住労働者にとって、通過するだけの韓国における時間や街で過ごす歩行の時間は一時的で、不可逆的なものとして経験される。すでに述べたように「移住民共同体」を設立する企ては、この一時性に抗し、特定の場所を固有のものとする企てである。個々の移住労働者の一時的で不可逆的な時間の中で、移住民共同体はそれらの個別的な時間を超えて存在しなければならない。個別的な時間を超えて存在するというのは、今いる個々の移住労働者の個別的な時間を繋ぎ、将来に渡って存在し続けるということである。そうした移住民共同体を現実化できるのは、別離の要請から逃れ、特定の場所にいつもいる存在なのである。固有の場所としての移住民共同体とは、そうした者たちを中心に置くことで作り出すことができるものなのである。

謝辞

本研究の調査の一部は、松下国際財団「研究助成」(2010年4月～2010年9月)および、みずほ国際交流奨学財団(2011年12月～2013年4月)からの助成金によって行われた。

本論文は、2015年の日本文化人類学会第49回大会において開かれた分科会「一時性の人類学」での筆者の発表内容を基にしている。代表者の木村周平氏を始め、丹羽朋子、土井清美両氏の発表および春日直樹先生のコメントに多くの示唆を頂いたことを明記するとともに、お礼を申し上げたい。

参考文献

アパデュライ、アルジュン

2004 (1996) 『さまよえる近代 グローバル化の文化研究』、門田健一訳、平凡社。
オジェ、マルク

2002 (1994) 『同時代世界の人類学』、森山工訳、藤原書店。

Brettell, Caroline B

2000 “Theorizing Migration in Anthropology: The Social Construction of Networks, Identities, Communities and Globalscapes,” In Brettell, Caroline B. and James F. Hollifield (ed.) *Migration Theory*, pp.97-135, London & New York: Routledge.
クリフォード、ジェームス&ジョージ・マーカス (編)

1996 (1986) 『文化を書く』、春日直樹他訳、紀伊国屋書店。

Cowan, Jane K.

2006 “Culture and Rights after Culture and Rights,” *American Anthropologist* 108(1): 9-24.

Davis, Mike

1999 *Ecology of Fear: Los Angeles and Imagination of Disaster*, London: Picador.

ド・セルトー、ミシェル

1987 (1980) 『日常実践のポイエティック』、山田登世子訳、新栄堂。

エリアス、ノルベルト&ジョン・スコットソン

2009 (1965) 『定着者と部外者—コミュニティの社会学』、大平章訳、法政大学出版社。

Friedman, Jonathan

2004 “Globalization,” in Nugent, David and Joan Vincent (ed), *A Companion to the Anthropology of Politics*, pp.179-197, Oxford: Blackwell.

한국방송학회 엮음

2011 『한국 사회 미디어와 소수자 문화 정치』 커뮤니케이션북스. (韓国放送学会 (編) 2011 『韓国社会メディアとマイノリティ文化政治』、コミュニケーションボックス。韓国語)

ハーヴェイ、デヴィット

1999 (1991) 『ポストモダニティの条件』、吉原直樹監訳、青木書店。

이정환&이성용

2007 “외국인 노동자의 이주 특성과 연구동향”, 『한국인구학』, 30(2): 147-168. (イ・ジョンファン&イ・ソンヨン 2007 「外国人労働者の移住特性と研究動向」、『韓国人口学』 30(2): 147-168。韓国語)

이태정

2012 “한국 이주노동자의 이주과정과 변형 아이덴티티”, 한양대학교 대학원박사논문. (イ・テジョン 2012 「韓国移住労働者の移住過程と変形アイデンティティ」、漢陽대학교大学院、博士論文。韓国語)

조혜영 외

2013 『국가산업단지 인력구조 변화와 인력 미스매치 해소를 위한 과제』, 한국산업단지공단 산업입지경쟁력연구소. (조・헤ヨン他 2013 『国家産業団地人力構造

変化と人材ミスマッチ解消のための課題』、韓国産業団地公団 産業立地競争力研究所。韓国語)

김선임

2012 “이주노동자공동체 형성에서 민족 정체성과 종교 정체성의 경합”. 동국대학교 대학원 박사논문. (김·송임 2012 「移住労働者共同体形成における民族アイデンティティと宗教アイデンティティの競合」、東国大学大学院、博士論文。韓国語)

김영순 외

2013 『영상미디어 교육의 이해』 커뮤니케이션북스. (김·윤순 2013 『映像メディア教育の理解』、コミュニケーションブックス。韓国語)

キムリッカ、ウィル

2000(1998) 『多文化時代の市民権：マイノリティの権利と自由主義』、角田猛之、石山文彦、山崎康仕監訳、晃洋書房。

Levitt, Peggy and Nina Glick Schiller

2004 “Conceptualizing Simultaneity: A Transnational Social Field Perspective on Society,” *International Migration Review* 38(3): 1002-1039.

Malkki, Liisa

1995 “Refugees and Exile: From ‘Refugees Studies’ to the National Order of Things,” *Annual Review of Anthropology* 24: 495-523.

Mead, Margaret

1930 *Growing Up in New Guinea*, New York: Mentor Books.

小田 亮

1997 「ポストモダン人類学の代価—ブリコロールの戦術と生活の場の人類学」、『国立民族学博物館研究報告』 21 卷 4 号: 807-875。

오경석 외

2008 『한국사회 지역 연구 전환기의 안산: 쟁점과 대안』 한울아카데미. (오·김·송·윤·송 2008 『韓国社会地域研究 轉換期の安山：争点と対案』、ハヌルアカデミー。韓国語)

Park, Kwangwoo

2014 “Migration and Integration in Borderless Village: Social Capital among Indonesian Migrant Workers in South Korea,” Ph.D. dissertation, University of Sussex.

Portes, Alejandro, Luis E. Guarnizo and Patricia Landolt

1999 “The study of transnationalism: pitfalls and promise of an emergent research field,” *Ethnic and Racial Studies* 22(2): 217-237.

법무부

2011 『출입국·외국인정책통계월보 2010년 12월』, 법무부. (法務部 2011 『出入国・外国人政策統計月報 2010年 12月』、法務部。韓国語)

2013 『출입국외국인정책통계월보 2012년 12월』, 법무부. (法務部 2013 『出入国・

外国人政策統計月報 2012 年 12 月』、法務部。韓国語)

サイード、エドワード・W

1993a (1978) 『オリエンタリズム 上』、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社。

1993b (1978) 『オリエンタリズム 下』、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社。

サッセン, サスキア

2004 (1998) 『グローバル空間の政治経済学 都市・移民・情報化』、田淵太一・原田太津男・尹春志訳、岩波書店。

杉島 敬志 (編)

2001 『人類学的実践の再構築—ポストコロニアル転回以後』、世界思想社。

テイラー、チャールズ

1996 (1994) 「承認をめぐる政治」、エイミー・ガットマン編『マルチカルチュラリズム』、佐々木毅、辻康夫、向山恭一訳、岩波書店。

上田 達

2010 「居座る集落、腰かける人々——マレーシアの都市集落の事例より」、『文化人類学』75 卷 2 号: 216-237。

Moving Through and Embeddedness: A Case of an Establishment Process of Cambodian Workers' Association in Ansan City, South Korea

Hiroki Bell

After 1960s, the concept of cultures, coinciding with that of communities, as bounded, territorialized, non-historical and unchanged units has been criticized. This series of criticism helped to introduce new topics focusing on socio-cultural dynamics and instability. However, ironically, globalization studies and studies on multiculturalism contain the old concept of cultures and communities by looking at from high angle perspective. From this perspective, the world is imagined as if space of flows invades stable places and divides them into fragments. Therefore it insists on the concept of ethnic identity that is assumed as a bases of collectivity as well as the cause of fragmentation. Previous studies dealing with migrant workers' "communities" in South Korea also demonstrate the existence of these trends.

In contrast, this article proposes a walkers' perspective in de Certeau's term. Walkers walk around cities so as to compose their stories and create their own spaces. de Certeau calls it a "practice of space". In this perspective, migrant workers can be comprehended as someone "moving though" on a vehicle, because they are not accepted as settlers but only as temporal residents.

This article is dealing with a case of an establishment process of Cambodian workers' association in Ansan, which is well known as "Borderless Village" in South Korea. This association was established through support from a media activist organization which did not aim to organize any "migrant communities" at the beginning. Media activists tried to set up an open place for all migrant workers who were interested in studying film making. On the one hand, migrant workers are temporal residents and therefore they are supposed to "move through". On the other hand, pointing a camera at a certain object requires one to keep a distance with the object, an action that displays another manner of "moving through". However, both media activists and migrant workers do not only "move through" but also walk in a city. The media activist organization is a meeting place for them to meet each other. This Cambodian workers' association was established for sustaining this place that was getting a shelter for Cambodian workers. But in this process, the association needed to "embed" a Korean media activist as an anchor for Cambodian workers' networks. This case demonstrates that "migrant communities" are not based on ethnic identity but on an anchor of the networks, who is "embedded" and always presented in a certain place.

Keywords

labor migration, South Korea, migrant community, social support, practice of space